

拾い物立身譚：藁しべ長者から塩原多助へ

中込, 重明 / ナカゴミ, シゲアキ / NAKAGOMI, Shigeaki

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

60

(開始ページ / Start Page)

36

(終了ページ / End Page)

44

(発行年 / Year)

1999-07-10

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020068>

拾い物立身譚

——藁しべ長者から塩原多助へ——

突然成り上がる輩が、伝説や中世説話には少なくない。歌を一首詠んだその才により下賤の人間が高貴な生活を賜る。一つの機転や頓智で地位が昇進する。あるいは暴れ馬を止めた手柄で士分に取り立てられる。また、およそ非現実的な話で、夢をかうことで出世の糸口を得るというのも同じことが指摘出来よう。彼らは、たちまち身を立て名を上げる訳で、その多くが劇的であるが故に、成功・立身に至るまでの描写が乏しい。これは、長者譚と同じ事。富貴に至るまでの顛末において、おしなべて超越的な内容で、神仏の敬虔な帰依による奇跡・靈験、孝行に対する恩寵や、その功德により、やはり突如富貴になる話が、その殆どと言って差支えない。金塊の発見による炭焼長者にしろ、蜻蛉長者にしても、また東京の中野長者や大歳の火に因む長者等。これらは前の立身出世譚よろしく、ある時を境に、俄に長者に変身するものばかりだと言つていい。なかには、出世や致富等まるで期待しないのに、棚から牡丹餅に事態が好転、陰徳ここに報われ、栄華な境遇に収まるというものも多い。

中込 重明

近世期、この種の長者譚の系譜は仮名草子（後述する市守長者など）や黄表紙、随筆などに認められる。一方で、現実的な構成の話も多く生産され始めた浮世草子以後の近世説話においては、中世説話にはない特色を帯びた新しい長者譚が生成してゆく。ただ、本稿の主旨に据える近世長者譚の祖型というべき話が、まるで中世説話や伝説に見られないのかと言えば、そうではない。

貧しい男が観音に致富を願った。すると、手にした物を決して捨てるなという御告げを賜る。男は一本の藁を拾う。すぐに、虻も捕まえたので、それを藁に結ぶ。これを見て欲しかった若君に蜜柑と交換。そのあと、別の人と蜜柑と布を交換、さらにこれを馬に代え、最後は馬の代わりに田と家を手に入る豊かな長者になる。

「藁しべ長者」として、周知の昔話だが、これと同じ話型が中世説話集等に見られる。すなわち、『今昔物語集』卷十六―二十八「参長谷男依観音助得富語」や、流布本『宇治拾遺物語』七

一五、『古本説話集』下五十八、『雑談集』五。⁽¹⁾そして、『大悦物語』(御伽草子『大黒舞』)もその類話で、これは御伽草子『梅津長者物語』に近い(平出鏗二郎『近古小説解題』)。「大悦物語」は清水観音だが、他はいずれも長谷観音の靈験譚として語られる。外国の例では、『ジャータカ』や仏典『六度集経』に類話(『日本昔話通観・研究篇2』)。他の長者譚や成功譚が、一つの功德や功績により、一躍、一夜にして、お目出度い結末となるのに対し、「藁しべ長者」には次々に物を交換する曲折があり、短絡的ではあるものの長者への行程が描かれている。そこには、立身成功に至るまでの指針が示されていた。観音のお告げにそれがあるから、前の幾つかを覗くと、やはり昔話同様こうだった。「只、手ニ当ラム物ヲ不棄シテ、汝ガ給ハル物ト」(小学館古典文学全集『今昔物語集』)。「手にあたらん物を取て、捨ずして持ちたれ」(日本文学古典大系『宇治拾遺物語』)。要は、手にした物を捨てぬようにという戒めである。多少読みを深めれば、どんなに粗末な物だとしても、かりそめにも「捨てるなかれ」という具体的にその後の行動を示唆する教訓である。これは、たとえば「朝日長者」の類に見られる「くを掘れ」のように、祈願者に行動を指示するものであっても、一足飛びに富に有り付けるわけではない。初めに手にした物から徐々に高価なものに変転する趣向がある。故に、突発的な一夜型の長者譚に対し、こちらの方は、一步一步の段階型長者譚と命名しておきたい。

以下の論考においては、厳密に「藁しべ長者」の系譜を追うのではない。第一、「藁しべ長者」が藁をつかんだのは自己の選

択とは言い切れず、甚だ主体性に欠き、また先々触れる説話に見られるように資本を蓄積する行程はない。では、わざわざ「藁しべ長者」を持ち出す理由とは何か。それは、必ずしも直接結び付けられぬものの、近世説話に散見できる段階型の長者譚と「藁しべ長者」には、奇しくも、二つの共通点があるからである。その一つが前にあげた「捨てるなかれ」。

捨てる事の戒めは、翻つて、拾う事の勧めになる。そこで、まずは物を拾う事で立身する近世説話を探ってみよう。手近なところで直ぐ思い出されるのが、井原西鶴の浮世草子『西鶴諸国はなし』(貞享二年刊)巻五―七「銭が落としてある」だろう。江戸に出て金を拾えという冗談を真に受けた男。本当に江戸へ行き「五匁七匁、先をれの小刀、または秤のおもりかたし目貫」などを拾ったと、世話になつてゐる人に語る。すると、人の言葉を正直に信じるひたむきな男だと称賛され、わざと金目の物を落として拾わせる等多くの鼻肩がつき立身する。これは、拾つたものが直接この男の成功を導いたのではなく、その姿が人の信頼を招いた上の恩恵である。滑稽な男の行動が、どこか寓話的であるのは『西鶴諸国はなし』の現実性が欠落した全体の特徴に倣つている。この「銭が落としてある」を踏襲したのではないかと判断できるのが、浮世草子『世間長者容気』(宝暦四年刊)巻三―二の話。京のある男、暮れると京の街を拾い物をして生活。小銭は貯めて、金目の物は売って金にする。夜明け帰って来ては昼時まで戸を閉めておくので、不審がられ寄合に呼ばれると、一切正直に話し、大金も出来たので故郷の

大和に帰り長者になる。続いて、市場通笑の黄表紙『富貴花の御

江戸』（天明三年刊）は、こうだ。ある店子はいつも呑気に暮らしているの、何をしているのか気になった家主が二日跡を付けると、江戸の町を歩くばかり、家主が膝を交えて問うと、自分は拾い物を商いにしていると男が答える。すると、家主は拾い物なぞする男の自堕落を責め、男にもつとかたい商売をするように勧め、男はその言葉に従い後に大身代となる。尚、これは落語「地見屋」の原話であろう。^②

これらの説話は確かに拾い物、或いは拾い物を契機に徐々に身を立ってゆき、大成してゆく。だが、本稿が追うべき説話は、このようなものではない。なぜなら、これらも一步一步型の長者譚には違いないのだが、彼らは初めから金目の物を狙って拾っている。^③もつと、「藁しべ長者」に近付けた説話を抽出して行きたい。再び確認するが、「藁しべ長者」の戒めはこうだった。どんな粗末なものでも捨てるなかれ。

唯楽軒の浮世草子『立身大福帳』（元禄十六年刊）巻七は、町人向けに様々な教訓が書かれてある巻だが、其の中にこんな記述がある。

錢ざし 錢をぬきたる跡をすてぬ物也 先にて錢をつかいさ

し明たらば一筋にても袖へ入て帰るべし さやうに心得る人はかならず一代の内に大銀をもつ也是をそりやくにしてすてる人はいづれもひん也これ冥理也 紙屑 ずいぶんとまめにひろひかごへ入るべししまつとい

ふはかやうの事なり捨る物をすてぬやうにする事第

一の始末也（国立国会図書館蔵本）

これは節約を推奨する箇所の引用だが、錢縊と紙屑が捨てぬ物、大切にすべき物として挙がっている。尚、この錢縊だが、以下、おいおい引く「拾い物立身譚」のなかに多く錢縊も出てくるので、それも注意して見ていこう。なぜなら、この錢縊こそが、近世説話を通観すると、まさに『立身大福帳』の文句に違わず、立身成功の重要な小道具なのである。

「藁しべ長者」が藁を捨てなかつた、つまり藁を拾ったように、本旨に据えたいのは、同じ西鶴の浮世草子でも、第三者がもはや無価値と思える代物を拾う『日本永代蔵』（貞享五年刊）巻三——「煎じやう常とはかはる問藁」のなかにある次のような一節だ

元手なしに儲けを企む男、ある時仕事帰りの大工が鉋屑や木端を落しながら歩いていけるのを見かける。不用とみえ拾いもしないので、跡に付いてこれを拾い集める。そして、鉋屑を売り、木端を削り箸を作り八百屋に売る。これを繰返し、やがて資金を蓄え一軒の材木屋を開く^④

同じく、『日本永代蔵』巻一——「浪風静かに神通丸」。

大阪北浜にて陸上げする米を拾い集め、それで食事を賄う貧しい後家がいた。この子供がそんな母の背中を見ていたとみえ、「九歳の時よりあそばせずして、小口錢のすたるをひろひ集めて、錢ざしをなわせて、両替屋・問屋に」売りに行き金を貯め、後に自らも一流の両替屋になる。

ところで、やや脇道にそれるがこの「浪風静かに神通丸」を、

一夜型長者譚の系譜と比較を試みよう。例えば、この説話に仮名草子「大倭二十四孝」（寛文五年刊）巻一—三「市守長者」を照合する。莊園を失い妻子をつれて零落した橘諸兄は、大和の国三輪の里のみすばらしい庵にいた。この時、盲目となった父・諸兄に代わって一家を支えたのが諸兄の子・市若丸。この孝行の徳がお上の耳に届き良縁に恵まれ、果ては時の帝も行幸する程の長者になったというものだが、具体的に市若丸の称賛された孝行とはこうだった。

ちいさき箒を持。市のあたりへ立よりて。米穀のこぼれしをはきあつめつ 庵りにかへり。露の命をつなきけり。かくて年月過ゆきしに。市若十二の比より 父両眼をわづらひ出し。母はつきそひあつければ。市若ひとり市に出て。例のこぼれ米をはきあつむるに。

（古典文庫）

こんな事を市若は暑さも厭わず寒さも苦にせず十年続けた結果、長者となっている。年月の積み重ねはあるが、その栄華は市若の望外のことである。従って、これは近世期に書かれた説話だが、米拾いの行為が徳として認められた一夜型の長者譚と言えよう。これに対して、同じ米拾いで家族の糊口を拭わせるも、西鶴は前の母に恩寵めいた事は一切加えなかった。この点に中世的説話空間から脱却し現実的な脚色が施され始めたと考えておきたい。要するに、他に例を見ない一つの功德で富裕になるのが中世説話や伝説の特徴であるならば、近世のそれは、一つ、一つの積み重ねによって長者になる点に説話的な新しさ

がある。

青木鷲水の浮世草子「古今堪忍記」（宝永五年刊）巻七—四「富貴する堪忍」は、山城生まれで主人とともに江戸に上った白木の勝兵衛が、弘法大師が書いたという「忍」の字を朝夕拝みながら出世する話だが、ここに次のような一節がある。

朝毎歩行に紙屑の落ちりて道端にあるをひた物拾ひ上て帰る事度かさなれば集て売に年中の花紙下帯ほどの事ハ只まふけと成に折ふしハ小粒のまめいたを拾ひ二朱判の一つも捻り紙にまじりてある事など珍しからず（青木鷲水集第四巻・ゆまに書房）

さらに、身代をつくった勝兵衛は京に上り薪商いの店を出すのだが、ここでも次のような行為に及ぶ

鴨川のながれを前に引うけ朝より晚迄川ながれの木ほせ藁切古つぎ何によらず拾ひ上げよと小童一人つけおきて拾はせ居宅の裏に大きな穴を掘近辺の芥を捨させ此中より木竹の類を撰いだして町中の水風呂の下に焼用に直段をやすく売鉄釘の類ハあつめてつぶしにとらせ古つぎきれのいハ五条なる古手屋へやりて銭になし

今日注目を浴びるリサイクル商法の嚆矢とでも言えるか。また、月尋堂の浮世草子「子孫大黒柱」（宝永六年刊）巻六—二「九年めの門松」。天王寺屋吉兵衛は借金で身代を潰すが、正月の門松

もたてず奮起し、金を返済。そのせがれが何も教えないのに、銭さしを百筋なつては小銭屋へ二文で売りにゆく、そんなことを繰り返して立身する、という話。この種の長者譚の高い頻出度が、この頃の人間社会とまるで無関係ではあるまい。おそらく、この背景には、他力本願ではなく、自分個人の技量と努力、蓄えの如何で社会的な地位を躍進しうる地盤が世の中が確立され始めたといえまいか。

宝永以後の八文字屋本の浮世草子にも拾い物立身譚は引き継がれていく。江島其磧の『商人軍配団』（正徳二年刊）巻一―二「揚屋へはかり出す米屋の仕果」の冒頭にこうある。「旦に星をいたゞいて。寒前に酒屋の米を踏に通ひ。夕は月にむかふて草鞋をつくり。捨りゆく藁屑迄取あつめて。鍋取銭さしに拵へ。若時からつなぎ溜めて。五百七拾五匁を元手とし。小商ひのありそふな所を聞たて。耳塚の前にて小米屋をして。次第くくに富貴の身となり」。同書巻一―三「貧苦を切替へる骨牌の絵書」は、かるたの絵書きが隣の長者を羨ましがり、「人の捨てる物をひろいてもちゆる方へもつてゆかば。銭をもうけぬといふ事はあるまじ」と一念発起。そして、こうある。

朝とく起て第一本持。京中の寺々の墓の掃除をして。櫛の葉のちりたるをひろいあつめ。宿へ持帰りて櫛に似たる葉を。ひろい寄てひとつに打ませ。日に干白にてはたき。花抹香にして売けるほどに。元手なしに銭をもうけぬ。是より寺々へまはる道すがら。馬の沓草履草鞋の切たるをひろいとりて。是を水にて砂をすゝぎおとしこまかに切て。左官釜塗の所へ。

すきにしてあきなひければ。次第に人のしらぬ銭をもうけ。

その後、生薬屋などを営むなどして、果ては五万両の長者になる。その他に、浮世草子『商人職人懐日記』（正徳三年刊）巻二―三にも、街に捨てられた煙草を拾い集め金を儲ける話。浮世草子『近代長者鑑』（正徳四年刊）巻二にも、元手のいらぬ儲けとして、銭さしをなう、ことが挙がっている。浮世草子『四民乗合船』（正徳四年刊）の「商」には、零落れた若旦那が杉原紙の反古を伸ばし元結にして成功する話がある。其磧の浮世草子『商人家職訓』（享保七年刊）巻一―一にも、「捨りゆく塵塚迄も銭さしにこしらへ」金銀をため俄長者と呼ばれるに至った者もいる。同じ、其磧の浮世草子『渡世身持談義』（享保二十年刊）一之巻―一にも、大坂くだりの旅人の風呂敷を持つ事で賃金をとり、その帰り、火打石を拾って売る、という下りがある。そして、「捨てるなかれ」の戒めは、説話のジャンルから外れた江戸中期頃の書物にも見付けられる。例えば、心学者・石田梅巖『齊家論』（延享元年刊）下に「儉約は財宝を節く用ひ、我分限に応じ、過不及なく、物の費捨る事をいとひ、時にあたり法にかなふやうに用ゆる事成べし」（日本思想大系・傍点筆者）とあり、さらに後々栄軒金陵の『財宝速蓄伝』（明和九年刊）のなか、金を貯めるには油断が禁物と説く段にこうある。

銭一文あだなるつかひは勿論、大道に落ちる草鞋繩きれひろひ取つて、雨にしやれさせす寸砂とせんとかんがへ、蜜柑の皮紙屑拾ひ蓄へ、（中略）何によらず世のつひえをかんがへ、

塵つんで山と成と氣を付るがひんずの餘徳となる（通俗經濟文庫二）

顧みれば、右のような塵も積もれば山、蟻が塔を積む如くの発想は、既に近世前期、寛永四年刊行の『長者教』に、「ばい三、ばい四と、めぐる事、なぐるゝみづ、月日のごとくにて、ちうやとどこほる事なし。一二をうけ、二三をうく。みじんつもつて、山となり、一おくの長者となる」（日本思想大系）という教えに一致していた。

拾い物立身譚から武家と町人を考えれば、金品の蓄積に因む話は、武家には端から縁が薄いのとは勿論、落ちてゐる物を拾うのは士族の沽券に関わるものであつたか。多くの傍証は出来かねるが、例えば『窓のすさみ』（享保九年自序）の小石川の孝行息子の話に、侍の子が落ちてゐる物を拾うのは盗みのはじまりだと、親に打擲される下りがある。一方、プライド等気にもかけぬ町人らは裸一貫でも大成できる世に生き得たのである。

時代は降つて、十返舎一九の滑稽本『世の中貧福論』（文化九年刊）上―二「貧富はふつてわく棒振虫」を見てみよう。この巻には、小間物屋として大成する人物が出てくるが、その下積み時代の苦勞が冒頭に記されている。それを引用しよう。

旦に星をいたゞきて。寒前に酒屋の米を踏みに通ひ。夕には月にむかひて草履わらじをつくり。元手なしにすたりゆく藁屑も拾ひあつめて。錢さしにこしらへ。わづかの錢からつなぎためて。次第く富貴の身となり。（国立国会図書館蔵本）

既に、氣が付いたであろうが一九のこの一文は前引『商人軍配団』（巻一―二）に拠つてゐる。もつとも、『世の中貧福論』を通観すると、一九は明かに『商人軍配団』を、その種本として十二分に流用している（その他『子孫大黒柱』も）。ただ、これらの典拠を細々論じるのが、本稿の主旨ではないのでこれ以上書かないが、八文字屋本の浮世草子の趣向が一九によつて継承されてゐる事は、ここに確かめられた。他に、近世後期の文献では『雲萍雜志』（天保十四年刊）巻一、浪華の紀伊国屋亦右衛門の話にも拾い物を駆使した商法あり。

さらに、捨てる事の戒めと拾う事の勧めは、明治以来最も有名な立志伝中の人物の逸話に受容される。すなわち、塩原多助である。その原型を成した三遊亭円朝の人情噺『塩原多助一代記』の単行本の刊行は明治十八年だが、その成立は明治八年頃とされる（永井啓夫氏『三遊亭円朝』）。明治二十五年一月には歌舞伎座で芝居化され、その後、愛馬を繋ぎ止め江戸に発つ痛切な「青の別れ」をはじめ、主に大衆芸能で塩原多助の立身譚は、奮闘努力し身を立ててゆく人物として明治以後の世相において歓迎された。この『塩原多助一代記』のなかに、こんな場面がある。山口屋で奉公する塩原多助は、主人から給金を決める話を切りだされると、それを断り逆に主人に次のような事を持ちかける。

そこらに落ちてゐる廃物を拾いためて、それを売り、二文でも三文でも旦那様へ預けるから、安い利でいいが、わしい国へ帰るまで預かつておもらい申してえ（角川書店・三遊亭円朝）

これに対して、主人が何を拾うのかと、問うと。

なんてえことなしに廃りになるものは、たばこの粉でも草履わらじのいらなくってみんなが棄てるのは、縄つ切れでも紙屑でも、なんでもはあ、ためておいて売りやんす

その後、店の番頭が藁草履がなくなつたので、旦那に買うように頼むと多助は、それならある、と答える。その訳はこうだ。

みんなが鼻緒を切ると棧橋から川の中へほうり込んでしまうから、わしい竹の先へ釘を打って、それを引き揚げておいて、毎晩わしが鼻緒をたって、ぎゅうと真ん中を締めておいた。それに水の中へ入ったんだから先より丈夫になつておりやす

このように余念のない多助の資金作りだが、前に見たように西鶴ならびにそれ以後の浮世草子等に顕れていた方法であつた。つまり、強固な身分制度が存在する封建社会下の文芸に、塩原多助の祖型と唱えるに外れない人物が見い出せるのである。図らずも、この事は封建社会の世にあつて、日本経済の近代的な進み具合を象徴しているようでもある。さらに、三遊亭円朝が『商人軍配団』か『世の中貧福論』に精通していた事は高い確率であり得る。故に、拾い物立身譚は偶発的に説話中に発生したのではなく、浮世草子から一九、そして明治の円朝へという伝

達経路が、作者の創作過程から認められる。円朝は、この立身法が、ある程度、明治の世にも説得力を与える資金作りの手段だと判断して趣向を流用したのか。あるいは、そんな時事性など円朝の意図するところではなかつたかもしれない。ただ、少なくとも塩原多助が見習うべき姿として修身の教科書にも登場した事実を鑑みれば、往時の人達が「拾い物立身譚」を著しい時代錯誤と黙殺しなかつたのは確かだ。無一文同然の人間の成り上がり説話が、貞享・元禄から明治まで通用しえたのである。近世説話の儉約・蓄積を惜しまぬ長者の集約的人物造形を骨格に負っているのが、円朝の塩原多助なのである。

他にも、明治の段階型の長者譚はある。ただ以下引く二つには直接拾い物の趣向はなく、塩原多助の類型・焼直しとも言える。まず、桃川如燕の「見えたか甚兵衛」（今村次郎速記・明治二十六年・文事堂刊『桃川十八講談』所収）の粗筋はこうだ。

越後の国から上京した甚兵衛は米屋に奉公。ある日、甚兵衛は旦那から、さんだらほつちを一文で買う。それをほどいて、繒をこしらえると売りに行き十二文儲ける。この金で俵を買い、今度はそれで草履を作り、同じように売りに行き百文儲ける。その後も甚兵衛は様々な儉約と創意工夫で、末には小石川に炭・米・薪を扱ふ豪家・三河屋甚兵衛に立身する。

ここでは、円朝が『塩原多助一代記』では一切用いなかつた「銭繒」売りの趣向を取り入れている。なお、円朝が銭繒で塩原多助に小銭を集めさせなかつた理由は、後に引く幕末・明治における銭繒売りにまつわる悪いイメージを配慮したせいだ。さらに、銭繒が出てくる舌耕文芸として、落語「鼠穴」の前半部も

紹介しておこう。

商いの元を兄に借金したものの、三文しか貸してもらえなかった主人公。仕方なく、この三文でさんだらぼつちを買い、これで錢縵を拵え商家に売りに行き、三文が六文になる。また、この金でさんだらぼつちを買い、六文が十二文。そして、二十四文。これで今度は空き俵を買い、これをほどこいて藁を叩きやわらかにして、草履を作る。その間ほかにも、納豆や豆腐売りなど様々な商いをして、末には深川蛤町に間口四間半、蔵三戸前もある大商人に大成する。(参照・青蛙房『圓生全集』第四卷)

なお、この「鼠穴」だが、見たように前の塩原多助・三河屋甚兵衛の立身譚に似ているが、その全体的な出典については未だ不明^⑦。

拾い物立身譚の主人公達は皆一様に捨てる事を厭い、拾う事に励み一步一步立身していった。彼らは、主に何を拾っていたのか、何を資金作りの手始めにしていたのか。これを思い出すと本稿のはじめで明言を避けた「藁しべ長者」とのもう一つの共通点が浮かび上がってくる。『日本永代蔵』の子供も拾った「さんだら」とは、米俵の蓋であり、これは丸く編んだ藁でできている。再々出てきた錢縵とは、錢の孔に通す縄だから、麻製のものもあるが主に藁製である。塩原多助も拾った草履草鞋は、逐一説明する迄もないだろうが、これもやはり藁に関係ある。草履は藁や竹皮等から作られる物で、「草鞋は藁にて造れる鞋なり」(田安宗武『服飾管見』故実叢書・傍点筆者)。

近世説話において、錢縵を売りこまめに儲ける話が多く見られる事はわかった。では、作り話はともかく現実にそんなことがあったのであろうか。確実に近世前期の風俗を考証できる資料は知らないが、近世後期から明治にかけての文献は検索できる。それに当たると意外な事実が直面される。

錢差賣、京坂ハ、諸司代邸、城代邸等ノ中間ノ内職。江戸ハ、火消役邸ノ中間ノ内職ニ製之テ、市民ニ賣ル。(略) 生業ニ據テ、多少ヲ強賣ル。開店ノ家等、特ニ強賣ル。又、二三十年前ハ、毎時争論ニ矯ケテ、錢を貪ル。近年、宮ヨリ戒之。故ニ、三都トモニ、争論稀ニテ、貪ルコト薄シ。

喜多川守貞『守貞謾稿』卷之六生業(東京堂出版) また、幕末の遺臣・村山摂津守の手記『大奥秘記』(新燕石十種本)には、ガエン(火消し)が纏で錢縵を拵え、それを持って火消屋敷近くの家に一軒一軒売りに来るので迷惑し、金だけ与えてお帰り願うこともあったと記している。そして、この悪業が明治末期までも続いたことは次の「さし売り」と題した新聞記事からわかる。

旧幕の頃は諸商店にては彼の「さし売り」と称する無頼の爲め大に困却せし事ありしが維新以来警察の取締嚴重になりし故此の悪弊少くなりしに昨今又々巡查の目をみて大店に這入込み金錢をゆする者多くなりしとなり

(明治四十二年十一月十三日の「郵便報知新聞」) 錢縵を売って小金を儲けることは、虚構においてのみ見られたのではなく、事実あった。しかし、その錢縵売りは、前に引い

てきた説話の中から感じ取れる、傍から見ると息詰まるような営みとは異なっていた。近世説話では立身成功するために脈々と受継がれてきた伝統的な錢糴だが、現実には、強賣、すなわち横暴な押売りの小道具に過ぎなかったのである。

西鶴の引用はすべて小学館古典文学全集に、其蹟のそれは八文字屋全集(汲古書院)に拠った。尚、本稿の引用文は適宜現行字体に改め、内容に支障なしと判断し殆ど振り仮名は省略した。また、読む便宜を考え半字分開けた所もある。

(注記)

- (1) 福田晃氏「昔話の伝播―わらしべ長者と因果思想―」(『国文学解 釈と鑑賞』昭和50・11)等を参照。他に、藁しべ長者には三年味噌型がある。
- (2) 国立国会図書館蔵本の『花の御江戸』では刊行年が確認できぬが、棚橋正博氏の『黄表紙総覧』では天明三年と考証。「地見屋」については、拙稿「地見屋」の原話その他(『諸芸懇話会会報第二〇六号』平成十一年四月)。
- (3) 落ちてる金を拾い届ける事で生活が好転する説話も多くある(拙稿「金を拾うはなし」法政大学大学院紀要32号・平成六年三月)。これ等は一夜型に属すといえよう。
- (4) 浮世草子『好色大神楽』(貞享五年刊)巻一「欲より入る恋の道」でも、大工が無造作に捨てていったものを拾い集めておき、成功の糸口になっている。但し、これは前の西鶴のそれを模倣したものか(金井寅之助・解題、天理図書館善本叢書『浮世草子集(一)』)。因みに私事ながら、筆者の父の若かりし頃(二次大戦後)の貯蓄法の一つが、この西鶴の話に近い。現実にも、世相によつては、成し得ること。英・作家C・ディケンズの小説『我が共通の友』(一八六五)にも拾い物で財産をつくった男が登場する。
- (5) 円朝の「福祿寿」と同工の話が『商人軍配団』・『世の中貧福論』

にある。だが、円朝がどちらの文献に接したのかは不明(延広真治氏御教示)。

(6) 明治二十五年の塩原多助の芝居においても、この拾い物の話しは取り込まれている(『日本劇曲全集』32・参照)。

(7) 拙稿「鼠穴」と錢糴(『諸芸懇話会会報第一八一号・平成九年四月)。尚、「鼠穴」と「藁しべ長者」を関連付かせる視点は既に示されている(前引『圓生全集』輪講)。

(なかごみ しげあき・博士課程三年)